

# 異文化接触と蓄積体制

—レギュラシオン・アプローチの学際的展開—

平田清明



一 経験から概念へ

数年来連続する貿易黒字の増大は、日米および日欧の貿易摩擦を激化させ、最大の外交問題を醸成させている。それに対応すべく実施される政府主導の自主規制をこえて主要企業の海外生産は、急速かつ大規模に増大し、資本の国際化は万人ひとしくこれを目の当たりにするところである。それは自動車産業など生産資本の国際化であると同時に、アメリカ国債の日本生命保険諸会社による大量購入に見られるような貨幣資本の国際化でもある。

この資本国際化の一般的傾向の中で企業組織の多国籍化が進展し、企業活動の国際化が顕著に進行している。そのような普遍的傾向の中で、これまで接触するに至らなかった世界各地の諸文化の間に、緊張を孕んだ相互浸透が進んでいる。眼前に展開するこの異文化接触は、それ自体が、資本の再生産 $\parallel$ 蓄積の諸矛盾によってその緊張を多面化させ深刻化させられているものであるが、逆にこのことがまた、世界を循環して歩く資本のまさしく経済的な運動に、あるファンダメンタルなインパクトを与えている。

このインパクトは、生産と流通の両過程における技術的組織的な諸変化とくにME化に照応しており、しかも生産・流通の両過程に対して今や規定的な役割を果たすに至った消費過程の制御調整装置に独特の律動を与えている。

したがって私たちは生産様式における巨大な科学技術的転換と同時に消費様式における生活文化の変容を、目の当たりに経験しているのであって、今日ほど在来の伝統文化と新興の世界的な科学技術との間の関連が全地球的規模で語られたことはかつてなかったと言えよう。

資本のグローバルゼーションの上に展開する地球文化としての普遍性と各国各地方ごとの地域文化の特殊性との係

わり合いが、今日のように問題とされるのは、『世界史』始まって以来のことであろう。まさしく新しい人類史的な経験であると言わなければならない。

この経験が今、その内包する諸位相において反省され、新しい概念形成への道が始まっている。

特に欧米では一九七〇年代後半以降、経済危機が持続し、その内在的にして批判的な自己認識が既存の政治学、経済学、社会学の枠を起えて一つの新しい理論的アプローチを成立させるに至っている。

その中の一つにレギュラシオン・アプローチと言われるものがある。

それは、七〇年代危機が旧来の過剰生産恐慌ではなく、またオペック諸国の石油戦略という外因に基づく一過性のものであるのではなく、生産と消費およびこの両者を媒介する流通の総てを含む総過程の制御調整(レギュラシオン)における危機であるという現実認識の理論的対自化にほかならない。

その学問的な試みは、内にいくつかの潮流を含むレギュラシオニスト・アプローチの諸理論に結実しつつある。

この理論の概念装置について論述しつつ、現下に進行しつつある異文化接触の深層に多少とも迫ってみたいものと考ええる。

#### 〔基礎カテゴリーA——蓄積体制とレギュラシオン様式〕

レギュラシオン・アプローチと言われるものは、一九七〇年代危機に触発されたフランス国内でのマルクシストまたはマルクシアン<sup>(1)</sup>の諸派が、自己の研究対象をそれぞれ新たに措定しつつ分析装置の開発をおこなった方法的努力を言うのであって、フランス国内で三つの潮流があり、国外でこれに呼応するものとしてイギリスや西独の国家導出論者およびアメリカのラディカルズ等がある。政治学や社会学への影響力も強く、イギリスの有名な政治学者B・ジェソップによれば、世界中でほぼ十二の潮流が見られるとのことである。<sup>(1)</sup>

これらの潮流のうちバリ・グループの一指導者A・リビエツツは一九八八年の国際学会報告<sup>(2)</sup>において、資本の国際化に対応した国内における国家―経済関係の研究に必要な基礎的カテゴリーとして蓄積体制、レギュラシオン様式、ヘゲモニー・ブロック、ソシエタル・パラダイムの四つを提示した。これは彼自身がそれまでに提示してきたものを要約するものであると同時に、彼自身の理論装置を新たに強化するものである。

そこでの「蓄積体制」は、個別資本としての諸資本が生産・流通・分配―消費の過程を経過し、つつ相互に補完的な経済構造を形成する事態を念頭において構築された概念であって、長期的―体制的には社会的再生産構造を形成するものである。しかしリビエツツを含むバリ・グループにあってはこの蓄積体制というカテゴリーは、「過程する資本価値<sup>(3)</sup>」としての個別的生産資本の循環―回転過程であることが何よりもまず注目されるのであり、したがって、生産諸条件の変化と消費諸条件の変化とが注目され、またその両者の関連が特に集中的に分析されるべきものであるとされる。

しかしこの個別諸資本の循環―回転過程が社会的再生産構造を形成するにあたっては、自由競争段階とそれ以降とは異なる「制御調整（レギュラシオン）様式」（自由競争あるいは独占ないし国家介入）が作用している。金本位制や信用貨幣制度といったものが、この制御調整様式の重要な一環をなすものであると指摘される。

右記の学会報告においてリビエツツは蓄積体制とレギュラシオン様式との関連を指摘するにあたって、現代経済学の用語を援用しつつ、前者が「テクノロジーカル・パラダイム paradigmne technologique」と「ソシエタル・パラダイム paradigmne social」の変化によって規定される「マクロ・エコノミックな規則性」であるのに対して、後者すなわちレギュラシオン様式は「この蓄積体制総体の論理に諸個人の予測と行動を常に順応させるところの、混合され、ないし明示化された諸ノルム、諸制度、保障機構および情報諸装置の総体」であると規定している。

- (1) Jessop, B., 《Regulation theories in retrospect and prospect》, International conference on regulation, Barcelona, 16-18 June 1988. この外に、レギュレーション・バリ・グループの一人であるB・コリアが日本において行った講演「レギュレーション理論——その起源・独自性・最初の成果」、『現代市民社会の旋回』平田清明他編、昭和堂、一九八七年所収を参照されたい。
- (2) Lipietz, A., 《Gouverner l'économie, face aux défis internationaux : Du développementisme nationaliste à la crise nationale》, Ceprenap, N° 8815.
- (3) 「過程する資本価値」の原理的把握を日本において試みたものとして拙稿『経済学批判要綱』における「過程する資本」の概念展開（『経済学批判への方法叙説』平田清明著、岩波書店、一九八二年所収）がある。参照されることを希望する。

## 二 フォーダイズムとその国際化

一九七〇年代危機は、日本では「石油危機」そして「化石燃料危機」であった。しかし欧米では、そのようなエネルギー危機であると同時にそれ以上のものであった。この点で日本と欧米との間に経験のズレがある。

日本では石油危機は、西欧の経験したような社会的な危機を呼び起こすのではなく、「石油ショック」という「異状」事態を呼び起こした。ここにも経験のズレが見られる。

ここで少しく私自身の経験したことを記そう。

一九七三―七四年、私はヨーロッパに滞在していた。オベックの石油戦略が西欧のどこにでも経済危機を惹きおこしていた。しかし、日曜日の石油供給がガソリンスタンドで皆無になる、という程度の石油エコノミーが進められたにとどまり、配給制は語られるだけで終わった。テレビが映し出すのは、印刷労働者の自主管理運動であり、また、他ならぬテレビのストであった。それに新聞ストと造幣局ストが続いた。紙幣がこの造幣局印刷工のストのため不足し、

銀行や郵便局が『金づまり』になった。小切手による売買の特例が実施された。ストの波は遂に刑務所に及び、看守のスト、受刑者の『釈放』という事態が発生した。売春婦による教会の占拠と『売春の自由』の要求は、まさしくシンボリックであった。『社会危機だ』と私のような外国人居住者にも受け取れた。ところが日本では、この時期、『トイレットペーパーがなくなる』、いわゆる『狂乱物価』がおこる、という事態が発生するのではあるが、それは消費者運動を刺激するというほどのものであって、社会危機を醸成するに至るということはなかった。

テレビや新聞で知るかぎり、また日本からの諸種の私信から推測するかぎり、日本では石油危機という戦後最大の『国難』に立ち向かうべく、省エネ省力の『国是』が、経団連と政府によって提唱され、労組を含めてひろく日本の底辺がこれを受容しているかのようであった。

ところが西欧諸国では、外圧としての石油危機の強調は政府ならびに政権党にとって、外交上ならびに経済政策上の失策の自認に通ずるものであり、国民的コンセンサス作りの名文句どころではなかった。

さきほど指摘した、刑務所で看守のストが起きるといふことの背後には、勤労者たる労働者のアイデンティティの喪失という根底的な事態が進行していたのであった。

アブサンティズム(欠勤主義)やサボタージュの蔓延は、六〇年代の『五月』や『ヒッピー』に連動するものであった。

これに加えて低廉な移民労働者の導入が、早くも経済的にして文化的な摩擦を引き起こしていた。それは、摩擦をますます累増させ深刻化させていった。

自国内での異文化接触がいち早く始まり、すでに緊張を孕んでいた。

今日の欧米に成立しつつあるレギュラシオン理論を日本で受けとめる場合、右記に示したような事態を十分に踏まえておく必要が、本節付論(基礎カテゴリーB)に示す事柄とともに意識されている必要があるだろう。——というのは

この時期、当のフランスで後にレギュラシオニストになる大学生や大学院生が青春の知的形成を遂げていたのであり、一種の知的レトルトが、欧米各地において形成されていたのであった。

〔基礎カテゴリーB——ヘゲモニー・ブロックとソシエタル・バラダイム〕

レギュラシオニスト・パリ・グループの一代表者となったA・リビエツツは、彼の経験してきた政治的社会的危機と経済的危機との関連を問いつつ、彼らが行動し闘争した地平がブルジョワ社会における市民社会 *société civile* の地平であり、政治社会 *société politique* の地平であることを確認した。市民社会に成立するヘゲモニーと政治社会で制定される合法的権力との内面的な関連に注目すればするほど、そこには一方で社会を構成する諸個人のアイデンティティの所在、他方でヘゲモニー・ブロックの所在に関わる基本認識が確定されておらねばならないのであった。

社会内では「支配と同盟と譲歩の或る安定したシステム」が、経済的社会的文化的な諸集団、諸階層、諸階級の特定な連合として形成されているのであり、そこには「支配者、同盟者、中継者、被支配者」のヒエラルキーが見られる。このような「社会的ブロック」として「ヘゲモニー・ブロック」が形成されている。「それ故、ある社会的ブロックがヘゲモニーを獲得するのは、このブロックが自己の組織装置を国民全体の利益に合致したものと認知させた時なのである」。そしてこのような認知は、かつてルナンが言ったように「日々なる暗黙の人民決議」なのである。

この人民決議なるものは、現実の資本主義社会における日々なる経済活動において、また、その上に成立するヘゲモニー形成の場たる市民社会における「知的道德的リーダーシップ」の様態によって領導される。そのような経済活動や文化的闘争のなかで各人はそれぞれのアイデンティティと利害を表明するのであり、したがって



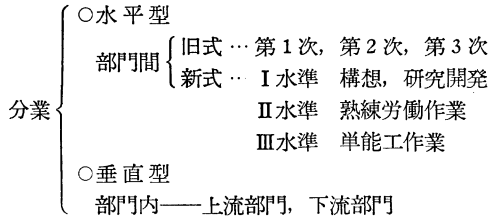
また、自他の差異を表現し確立化するのである。そのようなアイデンティティーの構造化様式 *mode de structuration des identités* をリビエツツは「ソシエタル・パラダイム」と呼んだ。そこには遠くグラムシから学んだ「国家すなわち強制力の鑑をつけたヘゲモニー」換言すれば「国家イコール政治社会プラス市民社会」という認識がある。

フランス人である彼らにとって戦後史は、一義的に議院内閣制によって特徴づけられた第四共和制と、議会制と大統領制の混合としての第五共和制との、相違のうちにあった。しかもド・ゴール主義的ないし準ド・ゴール主義（ボンビドー）的ヘゲモニーと中道連合（ジスカールデスタン）的ヘゲモニーとの差異のうちにあった。そして、その差異を顕著化させる政治的言説と行動のなかに人々は生きていた。そのような社会的文化的政治的な事柄が、一個の構造的連関をなしていた。つまり分散された小さなミクロの知の権力形態とメゾ・システムとしての消費様式・教育制度、マクロ・システムとしてのマスメディア・権力機構等を具体的に定義しているのであった。そして一九八一年以降、社会党政府の成立と崩壊と再出現とが、一人の社会主義者大統領のもとで成立するとき、そこには一種独特のコーポラティズムが成立していると認識されたのである。

コーポラティズムはヨーロッパにおいてかつてファシズムの一基礎になっただけに、コーポラティズム化という用語を嫌う知的雰囲気支配の中で、この概念は徐々にイギリスで学問上の市民権を得、フランスでも次第に肯定的受容が進んでいる。

このような西欧での事態との比較において言えば、日本は三十五年にのぼる保守連合政権の継続のもとで、情報化する高度資本主義が、ますます統合力を浸透させつつある象徴天皇制とともに共存している。そこで、*「労働なき（正しくは皆無でなく微少な）コーポラティズム」* が深く潜行し、かつ鋭角的に顕在化している。<sup>(4)</sup>

## 二重の国際分業



(4) この点については、次の諸論稿が参照されるべきである。

篠原一「ネオ・コーポラティズムの理論と現実」『基本法学2』岩波書店、一九八三年所収、山口定「ネオ・コーポラティズム論における『コーポラティズム』の概念」『思想』一九八二年四月所収、加藤哲郎「ネオ・コーポラティズム討論について」『国家論のルネサンス』青木書店、一九八六年所収、平田清明「現代コーポラティズムのプロブレマティーク」(神奈川県立経済貿易研究所『経済貿易研究年報』第十二・十三号所収)。

### 1 二重の国際分業

今日の異文化接触が、自国内でのほかならぬ労働の場で起こり、消費の場で起こっていることに注意する必要がある。

労働の場は、言うまでもなく分業の組織であり、消費の場は欲求としての文化の場である。

ここで今日の分業が上に見るような姿態をとっていることに注意しよう。

資本のグローバル化はこのような二重の国際分業を通じて展開されるのである。ヘクシャー・オリーン・サミュエルソン(H・O・S)流の旧式水平型部門間分業(第一次、第二次、第三次)が進行するかたわらで、それと並行し、それを凌駕する新式水平型分業としての「I」「II」「III」の諸水準が展開する。

それはまず第一に研究開発と構想を担当する特権的諸大学によるエリート養成の上立つものであり、単能工たるべき移民ないし教育脱落者の「維持」を必要とするものである。そしてその間に、平凡なサラリーマンたるべき中下層労働者の保蔵を内包している。

したがって、そこでは教育問題が深刻な社会経済的な内容をもつ新しい政治問題となっていく。

また、下流と上流との垂直型部門内分業として資本のグローバリゼーションが展開するとき、マーケティングの発展に媒介されて、需要管理の主導する供給管理という産業的レギュレーションが国内的国際的に変動を引き起こす。

下流を管理するための新しい消費様式が、諸種のメディアや教育機関を通じて押しつけられる。モデル、ファッション、ブランド等々といった、商品に付着する新しい記号の、支配。テレビCMの盛行。それはまさしく国内的国際的な文化戦争である。そこには多かれ少なかれ文化的民族的な諸価値の併存・統合と、違和・対立が相ともに存在する。

また、上流に向ってはテクノロジーとくにME機器とそのノウハウが、支配的なイデオロギーの内容をなしつつ、在来の異文化や自己文化にインパクトを与える。

上流に向っても下流に向っても新しい文化的接触が固有の緊張を孕んで進められている。

#### 〔ソシエタル・パラダイムとしての記号の支配〕

旧来の水平型分業に加えての垂直型分業を備えた社会の産業構造は、私的所有の上での共和制(ないし君主制)という制度的形態に枠づけられて、いま新たに科学技術と情報操作というパラダイムを国際的国内的に確立した。それは現代市民社会の構成要因たる教育機関やマスメディア、その他の文化的諸装置のなかに深く浸透し、資本のグローバリゼーションを内側から支えるに至っている。そこでは学校、新聞社、文化団体、宗教組織等が、それ自体、分散された権力形態(フーコー)としての特徴をもち、そこで教示される習慣 *habitus* (ブルデュー) は、あらがいがたい強い強制力をもつ。この種のソシエタル・パラダイムの持つ意味が、西欧、北米、日本で様相を異にしつつ、しかもそれぞれに特徴的な深刻さの度を深めている。<sup>(3)</sup>

(5) この点については拙稿「現代資本主義の政治経済学(序章)」、『思想』一九八七年八月所収を参照されたい。

## 2 地域統合としての国際化

右にみたような国際分業の特徴からして、二十世紀末資本主義の世界的傾向は、次の三つのリージョナル・オリエンテーションによって特徴づけられる。

(1) 北↓南

(2) 南↓南

(3) 北↓北

今日の資本移動は、北↓南だけでなく北↓北でもある。それどころか北↓北の方が北↓南をはるかに凌駕している。しかもNIEsに典型的にみられるように南↓南が新たな意味をもって登場している。

それらの間とくに北↓南にあつては、第一次と第二次の諸産業が北から南へ移転している。しかも国内における「Ⅲ」と「Ⅱ」の水準に立つ産業が南へと移転している。これを南の側で言い換えれば、輸入代替産業の移植と定着の過程である。

これに反して北↓北にあつては第三次と第二次の諸産業が相互乗り入れし、新型の「Ⅰ」および「Ⅱ」の諸産業ないし企業が相互移転する。そこには急速かつ広範な異文化接触がドラスティックに進行する。日本および日欧の間における異文化接触のもつインパクト。これは今日、コメ、牛肉、オレンジ等の自由化をめぐる国際競争において、まさに顕著である。

さらに、南↓南に目を転ずれば、東南アジア、南欧、中南米等における第一次産業ないし「Ⅲ」水準の移転にともなう融和と反目が人目を驚かすほど進行している。

それらの諸傾向の中であえて指摘すべきものを挙げるとすれば、一九九二年を目指すEC統合は、その域内諸国間における異文化接触を歴史上かつてない深さにおいて濃密化させるものである。ちなみに十二カ国からなるECは、それ自体が北↓北であるだけでなく、北↓南でもあり、また南↓南でもあるのである。経済的な最先進国である西独と最後進国のポルトガルやアイルランド等が一体となり、その間にあってイタリアが独自の発展を遂げてフランスとイギリスを凌駕するGNPを誇りえているということを私たちは見落してはならないであろう。

また、このECは東欧諸国との地縁的歴史的な諸関係に条件づけられて独特の西―東関係を形成している。ソ連のペレストロイカとイギリスの新自由主義とは、無論異質なものであるが、しかもなお、どこかで共有しうる共同の価値を探りあてようとしているかのようである。文化的な接触はここでは、異民族接触であると同時に、異体制接触でもあること、注意を要する。

さらにまたアジアにおける南↓南接触は、日本と他のアジア諸国との間の北↓南接触を起爆剤として進行する新しい精神的な律動を生んでいる。それを儒教文化圏の発展と呼ぶのは多少飛躍しているが、世界史を顧みて、やはり、一個の注目すべき歴史的な事実であると言えよう。

西欧諸国の工場内でアラブ人労働者がイスラム教の礼拝をしているとき、日本の東京では、パキスタン人やフィリピン人等々が街頭で工事をやり、ネオンのもとで働いている。

国際化は今や草の根におりたわけである。

#### 〔帝国主義の蜃気楼〕

ここにみた北↓北関係の圧倒的優越のなかでの北↓南、南↓南関係の進行は、世界史が十九世紀末以来の帝国主義段階を越えたことを告知するものであって、社会Ⅱ歴史認識の新しい地平開拓を必然化させるものである。

第一次大戦前夜におけるドイツ社会民主党内での帝国主義論争およびコミンテルンでのレーニン・テーゼに深く影響されてきたマルクシストが、第二次大戦後のしかも七〇年代以降での世界的な資本主義の展開のなかに、もしも『帝国主義』を見出すのであれば、それは蜃気楼 mirages であるだろう。既往の帝国主義を自己の眼前にあえて見るものなのである。それを見させうる何らかの要因がないわけではない。たしかに北↓北関係の優越のなかに資本と科学技術の圧倒的優越があるのであり、南総体に及ぶ圧倒的従属化の進行があるのである。七〇年代以降、この事態を世界システム論として展開した、I・ウォーラステインの見解は、資本主義の原罪が現罪でもあることを開示した啓発的な所見である。

しかし、レギュラシオン・アプローチに立つ人々にとっては中心―周辺関係としての一義性に徹した世界システム論は、システム形成の経過性を無視した結果論であり、資本分析において資本循環の運動主体を欠くものであった。「世界経済は存在するとしても、それはアクターではない」<sup>(7)</sup>のであり、飽くまでも「過程する資本」<sup>(8)</sup>循環する私的資本の再生産がもたらす相互的な帰結にはかならないのである。

彼らにとっては確かに「フォードイズムの世界化」という普遍的現象があるのではあるが、それは中心部と周辺部との緊張に満ちた関係によって特徴づけられている。(A・リビエツツはこれを、周辺部での「本源的テラー主義」から「周辺部フォード主義」への発展として性格づけ多彩な論議をまきおこした。)

かつての帝国主義論が、資本主義の本国による植民地従属国の経済的政治的軍事的な支配というイメージを定着させてきたのに対して、二十世紀末資本主義の現実においては、敗北した帝国主義的資本主義(ドイツや日本)の奇跡的復興の後で、それに追従するかのようなNIEESの進展があるのであり、このNIEESの奇跡さえいち早く奇跡でなくなりつつあるという事態が生起している。

しかし帝国主義が一個の蜃気楼に化したからといって、資本主義が資本主義でなくなったわけではない。多国

籍企業や多国籍銀行が諸国政府の政策的対応をとまないつつ、現代世界の新しい国際分業を創造しつつあるのであり、この事態が既に述べた旧式国際分業に覆いかぶさって「世界経済の二重化」を引き起こしている。そのなかで、とくに周辺部では、新しい工業化のための資金供給が国際流動性の過剰ないし豊富という好条件に恵まれている。また、中心部での需要増加という形態における外国市場の拡大も予期されえている。そこには論ずべき多くの論点を残すとはいえ、少なくとも、これまでの従属化論につきまとうってきた宿命論的性格は現実認識を誤らせるものとして批判される。「周辺部フォード主義」という規定についてはレギュラシオニストの間でも是非の議論が存在するのであり、今後の検討がまたれる。激動する東アジアに住む私たちにとっては、蜃気楼消滅後に眼前に現われ出る事態を、それとして明晰に受けとめ見きわめる方法論的視角を確保することが必要であるだろう。

(6) Wallerstein, I., *The modern world system*, Academic Press, New York, 1974-1980. (邦訳「川上稔」岩波書店「一九八一年」)。

(7) Lipietz, A., *Réflexion autour d'une fable*, in Boyer R. et al., *Capitalismes fin de siècle*, PUF, Paris, 1986. (邦訳「山田鋭夫他」日本評論社「一九八七年」)。

### 三 相互的国家嵌入と異文化接触

ところで今日では、国家が国内的にも経済への積極的な介入をおこなう国家となっている。構造政策としても循環政策としても国家は主体的に経済に介入し、その経済的機能は全機構のおよび全体制的なものになりつつある。それだけにいっそう国家はアリ地獄のように経済への嵌入 (*insert* はまりこみ) を深めている。その結果、国家は異常なまでに肥大化し、その権限を拡大化しているのであるが、そのことによって却って、国家活動は資本の運動に包摂され

従属化されている。

今や経済主義 Economisme が国家最高の理念である。そして経営者団体の指導者が政府の上に大御所として君臨している。

そこに成立している独特な産業的政治文化は以下の諸点によって特徴づけられている。

### 1 ボーダレス・エコノミーの中での一国主権の弱化と国粋化現象

資本のグローバルゼーションが多国籍企業の展開として進展するとき、一国の経済主権は、多国籍諸企業の世界戦略によって侵害され、ごく初歩的な、しかし基礎的でもある経済主権たる関税権等が容易に突破される。国民経済としての統一性さえも、グローバル・キャピタルの展開の前にはなおざりにされている。また、一国内の諸地域が政治上のナショナルセンター＝一国政府の統括を越えて、直接に世界的なネットワークに組み込まれる。言い換えれば諸地域が、一国の首都を経過しないでいきなり、世界的なメトロポリスに結びつく。したがって、ある種のメトロポリタン主義が発生する。しかしその反面でナショナルインタレストが、内には、そのような地域的利害によって、外からはメトロポリタンの利害によって直接に脅かされるため、国民国家としての歴史的過去に固執する国粋化現象が進行する。

ボーダレス・エコノミーの中でこのような国粋化が進行するのは、一国主権の弱化を補完するものとしてである。

ナショナルリズムとコスモポリタニズムとが混在するのは、一見奇怪ではあるが、実は両者は一卵性双生児なのである。ニューファッションと民族衣装の併用が、若者に浸透するのは決して不思議ではない。

### 2 マネーカルチャーと情報の支配

今日の新式分業が日々産出する商品は凡て、消費者たる諸個人のステイタスとアイデンティティを保証するもの



であるかのようなネーミングやデザインを世に氾濫させている。テレビのCMをはじめとしてダイレクトメールや諸種のモデル展示会等々、記号の君臨が、この二十世紀末を特徴づけている。この記号は商品知識と商品語の世界を造りあげ、しかも、それを日々新らたなものにしている。そのような記号Ⅱ名（Ⅱ名目）の氾濫は、マネーカルチャーとしての現代資本主義の物象化文明を象徴している。

象徴が今では最高に規定的なものになっている。

だが象徴とは、批判的に了解されるときある実体の疎外態、ある種の擬態ないしメタモルフオーゼ（変身）であることが自覚されるが、通例の日常的意識にとっては批判の余地なき明証そのものなのである。

生産と消費、この両者を媒介する流通。これら凡ての過程を貫くME化は、そのものが記号の創造を通じての情報操作にはかならないのであり、それだけに消費者は、『王様』と祭り上げられているうちに情報ないし記号の奴隷になりはてる。そこから本質的に、伝統文化の変質と異文化混合を通じてのアイデンティティー喪失が生れる。アイデンティティーの多面化による混合化、これを通じてのアイデンティティー消滅。この事態は、新しい社会的パラダイムの批判的省察を必要とするであろう。

### 〔時間の空間化〕

マネーカルチャーの根底に財の商品化、労働力の商品化があること、あえて言うまでもないはずである。しかし、このことがあえて指摘されねばならない。現代日本においては特にそうである。マネーカルチャーとは、別名、資本爛熟の文化ということである。

資本は総ての労働生産物を商品にしようとし、そうすることによってその商品の生産に社会的に投下された労働を商品価値という抽象Ⅱ記号に転化する。そしてこの価値Ⅱ記号は、意識空間における名目的な存在であるこ

とによって、なんと地価という抽象的な社会規定として立ち現われて来もする。この倒錯した世界。時間の空間化の進行する世界。最新にして最高の情報Ⅱ記号の支配、象徴の君臨。これは、魔法にかけられた世界の日常態にほかならない。<sup>(8)</sup>それをリビエツは著書『魔法にかけられた世界』において批判的に叙述した。

(8) この点については、拙稿「物象化文明に関する批判的覚書——精神科医との対話を通じて——」(『思想』一九八六年十二月所収)を参照されたい。

### 3 国際的自閉症と国家宗教

そのような混迷化のなかにいるとき、ひとは、その反動として、新たな装いをもって現れ出る国粹化に身と心を奪われかねない。このことは、世界のなかのどこでも多かれ少なかれ発生する現象であって、それぞれの国民国家において、その歴史的伝統を、ある時点で急に——しかも変容して——強調し、歪んだ民族主義を擡頭させる危険をとまなう。

日本で昭和天皇の病氣とその死去にあたって、昭和史が急拠、現時点での経済的繁栄に総括されるべく編集された。また、皇位の継承をめぐる神道の行事が国家的行事とされる事態が擬装されて進行した。これによって、日本の伝統的宗教とされる神道が、国家宗教の役割を果しつつあるかのようである。

神道はなんといっても、日本という国の自然宗教であって、それに固有な地域共同体的本性を免れない。固有の教義を持たないが故にそれはかつて仏教や西欧文明を拒否するより受容する思想的基礎をなしたことがある。しかし今日それは、自己閉鎖的な精神状況を世界の文化状況の中で作りだすイギオロギー装置になりかねないかのようである。今日すでにこの自己閉鎖症は、偏執狂的症候を現わし始め、自他双方による自己自身の診断を拒否する姿勢を濃厚にしている。

天皇制報道が他の文化圏の人々にとっては全く理解を超絶した独善と自閉——によりも国際的無責任体制の知的道徳的な無反省——に満ちたものであること、今日、異文化接触を日本の問題として語る場合、見落してはならないことであるだろう。

日本人自身にとって天皇制の論議は依然としてタブー化されていること、かつてのスターリン体制がペレストロイカ以前ではタブーとされ続けてきたことに類似している。

いま経済大国として世界に臨む、この極東の島国は、資本のグローバル化のなかで新たな病理的異状のなかに日々入りつつあるのではないだろうか。

この病の最大の特徴は己の異常を世界の正常と盲信することであり、おのが病の痛みを科学の診断にさらすのを拒否することにある。

スターリン体制が猛威を振ってきたソ連という薄日の国を、『経済大国』日本の私たちは、経済的後進国扱いにすることが今かりにできるとしても、実は政治的文化においてはペレストロイカ以下でもあることを自省してみることが必要なのはなからうか。

このことを国際的レベルで言い換えてみれば、ECがソ連と東欧諸国との文化的接触を深めていっただけ、日本はそれだけ東西の異文化接触に遅れをとっているということであるだろう。

ソ連と中国を東アジアにおいて直接の隣国とする国でありながら、このような事態を自ら招いていることは、思わざる不幸に通ずる不祥事である、と言わねばなるまい。

〔海外での天皇制論議〕

大喪に前後して日本の天皇制に関する論議が海外でも広く行われた。その多くは、日本の昭和という時代が軍

事的な対外侵略と経済的な海外進出、戦争の十五年と平和の四十年、無条件降伏と一人当りGNPアメリカを凌駕という目まぐるしい激動の時代だった、ということを外側から見ただけに、厳しい批判とこそばゆい肯定的評価の双方を含んでいる。とくにフランスの代表紙『ル・モンド』は一九八九年一月五―十一日号に特集を組んで、現在の極東駐在員フィリップ・ボンスの東京通信以外に、老練な記者ロベール・ギランの記事と東洋言語文化学院教授ビエール・スーリー氏の論説を掲げている。

ギランはその四十年にわたる日本駐在の経験にもとづいて昭和天皇の事跡を紹介する。そのなかで裕仁天皇が皇太子として英国訪問の帰途バリーに寄ったさい、初めて自分で金を払ってメトロ(地下鉄)のキップを買ったというエピソードを伝えつつ、「神秘」の王室の変遷を追跡している。その反面スーリーは「十五世紀にわたる古き王朝」がなぜ存続しえたかを解説し、その文中に、日本の優れた人類学者である山口昌男および中世史家網野善彦の所説を紹介している。網野教授の名著『異形の王権』(平凡社、一九八六年)の内容がそこに要約されているのは注目するに値する。――後醍醐親政前後の社会的動乱のなかで幕府権力の立脚する武士・農民層に対して、天皇・神社仏閣の「聖性」が立脚する社会的基盤は、かつての律令農耕民から浮遊する商工民・芸能民さらには非人・河原者等に移行したのであった。幕府権力によって親政を打倒されて以降、「天皇は、封建勢力に制覇されて社会の周辺に追い込まれ賤民と化し非人(文義的には非人類)と呼ばれるに至った人々の忘れられた君主」となったのであった――。

宗教的権威としての天皇が政治的権力としてどのように機能したか。これこそ日本史の秘密であり、また正史でもあった。祭政一致は真実であり、また、幻でもあった。

なお、一九八八年十二月六日付の『リベラシオン』紙上には「民主主義か天皇制か」と題した倉田清氏の論文が掲載されている。フランス文学史の研究者である同教授は、天皇制の神秘が伝統的宗教にもとづく不可避の必

然であるのではなく、むしろ時代によって造り出された国家理性であることを三島文学への批判の意味にそえて開示している。外国の新聞に発表された日本知識人の良心の声であるだろう。

結語にかえて

「異文化接触と日本」という主題は私にとって、蓄積体制における異文化接触のありようを対自化し、また、異文化接触が蓄積体制を逆に条件づけていることを理論化することであり、両者の概念的統合をいかに成立させるかという問題である。レギュラシオン・アプローチが、この主題をめぐる現状認識や概念装置の展開のうえで重要な手がかりを私たちに提供している、という思いを禁じがたい。時間や紙幅の制約のため十分に展開できなかった論点を多く残しているが、それらについてはあらためて他日を期したい。

付記——本稿は「異文化接触と日本」と題する横浜五大学連合学会シンポジウム（一九八八年十二月三日、横浜市立大学にて開催）において報告者として発表した論旨に、理論上の加筆をおこなった論稿である。

参考文献

- (1) Aglietta, M. (1976) *Régulation et crises du capitalisme*, Calmann-Lévy, 2<sup>e</sup> éd (1982). (若森、山田、大田、海老塚訳「資本主義のレギュラシオン理論」柘植書房、近刊)。
- (2) Aglietta, M. (1986) *La fin des devis clés, La Découverte*. (齊藤訳「基軸通貨の終焉」新評論、一九八九年)。
- (3) Inoue Y. (1985) 《Conceptualisation de la valeur en procès par A. Lipietz》, *Oikonomia* Vol. 21, No. 2/3/4.
- (4) Jessop, B. (1988) 《Regulation theories in retrospect and prospect》, *International conference on regulation*, Barcelona, 16-18 June 1988.

- (5) Van der Pijl, K. (1984) The making of an atlantic ruling class, NLR.
- (6) Hirata K. (1981) 《Conceptual evolution of “capital in process” in “foundations of the critique of political economy”》, Kyoto University Economic Review Vol. 51, No. 1/2.
- (7) Hirata K. (1989) 《L'informatisation et ses conséquences économiques et sociales : Le secret du succès de l'économie japonaise》, Kanagawa University Economic Review No. 1.
- (8) Hirsch, J. (1983) 《Fordist security state and new social movements》, Kapitalistate 10/11.
- (9) Bowles, S., Gordon, D. M., Weisskopf, T. E. (1983) Beyond the waste land : a democratic alternative to economic decline, Anchor Press/Doubleday. (都留 磯谷訳「アメリカ衰退の経済学」東洋経済新報社「一九八六年」)。
- (10) Boyer, R. (éd.) (1986) Capitalismes fin de siècle, PUF. (山田ほか訳「世紀末資本主義」日本評論社「一九八八年」)。
- (11) Boyer, R. (1986) La théorie de la régulation : une analyse critique, La Découverte. (山田訳「レギュレーション理論」新評論「一九八九年」)。
- (12) Lipietz, A. (1983) Le monde enchanté : de la valeur à l'envol inflationniste, La Découverte/Maspero.
- (13) Lipietz, A. (1985) Mirages et miracles : problèmes de l'industrialisation dans le tiers monde, La Découverte. (若森 井上訳「奇跡と幻影」新評論「一九八七年」)。
- (14) Lipietz, A. (1985) 《Le national et le régional : quelle autonomie face à la crise capitaliste mondiale?》, Couverture orange CEPREMAP no. 8521, minéo.
- (15) Lipietz, A. (1987) 《La régulation : les mots et les choses à propos de “la théorie de la régulation : une approche critique” de Robert Boyer》, Revue Économique no. 5, Septembre.
- (16) Lutz, B. (1984) Der kuerze traum immerwaehrender prosperitaet, Campus.